

文春新書

869

# 人間の叡智<sup>えいち</sup>

佐藤 優

語り下し・サバイバル帝国論



「停滞」と「格差」を  
生き抜く「武器」を  
身に付けよ

承知の上でそれらを使っていかにイメージ操作をしていくかというのが課題です。そうでなければ、これだけ大衆化が進んだ社会で、しかも資本の論理がどんどん中間共同体を壊していくなかで、国民を束ねて統治することは難しい。ときには「パンとサーカス」もつかい、ときにはファシズム的要素も必要になる。あるいはポピュリズムとの綱渡りの曲芸も必要になる。

言いかえれば、物語をつくること、ストーリーテリングの能力が必要なのです。物語をつくるのに必要とされるのは、アナロジーとかアイロニーとか、いままでは見えなかったような力です。日本浪漫派の保田與重郎のアイロニーの思想などが重要になってくると思います。直球では駄目なのです。そういう意味では、橋下氏は面白いし、民主党の前原氏がすでに十分面白い。前原氏の面白さを伝えるストーリーテラーが出現すれば、前原チームが起きる可能性があります。かれらは子供のときに苦勞しているから、物語をつくり出す潜在能力がある。自民党は二世議員が増えて、そういう力がなくなってしまったのが最大の問題でしょう。

一方、鈴木宗男氏などは、存在自体がポストモダン的とでもいうか、歩きながら「差異」を作り出している感じです。利権構造ももう持っていない。それでも数億という金が

集まるのは、いろいろなところで差異を作り出すことができる鈴木氏の力が面白いからです。登場するだけで面白いという形で、木戸銭を払わせているわけです。

面白さとか、アイロニー、アナロジーの力をちゃんととらえている人は、ファシズムを始めても、ナチズムとかヒトラーのようなことにはならないと思います。ヒトラーは本気だったから駄目だったのです。

『フランコと大日本帝国』(晶文社、二〇一二年)という面白い研究書が出ました。フロレンティノ・ロタオというスペイン人が書いた実証研究です。第二次大戦中、はじめは日本のスパイ組織などにも協力していたスペインが、日本の旗色が悪くなったら連合国側に傾斜して、最後は日本に対する宣戦布告の準備をするところまで行った。そのとき基準として用いたのは人種主義です。これは東洋の野蛮人に対する白色人種の防衛戦争だ。アメリカは人種主義に基づいているから支持する、という都合のいい物語を作り出したのです。スペインのフランコ総統はファシストですが、物語を本気で信じたわけではない。フランコは「本物の偽者」とでもいうべき存在で、ファシズムなんていい加減なものだと思いつながらやっていたわけでしょう。最後はスペイン国家を生き残らせる方法として、潰したはずの王制を戻して、世界でも珍しい共和制から王制への転換を遂げた。こんなことはお

そらく二十世紀でスペインにしかなかった出色の政治だと思います。ヒトラーはアーリア人種の優越という神話を用いたのですが、ナチズムに本気になってしまったためにドイツを潰してしまい、ムソリーニもその煽りを食って滅んでしまいました。

192

国家機能を強化した新・帝国主義の時代を生きのびるために、日本の政治家も二十世紀のアアシスト、フランコの「本物の偽者」からぜひとも学んでほしい。

そして日本という国家は、帝国主義時代のアナロジイでいえば、かつてのオーストリアハンガリー二重帝国のハンガリーの位置を占めればいいのです。この場合、アメリカがオーストリアです。ハンガリーがどうやって力をつけて二重帝国にまでもっていったのか。その歴史を学ぶ必要があります。